

第2章

健康

第1節 発育

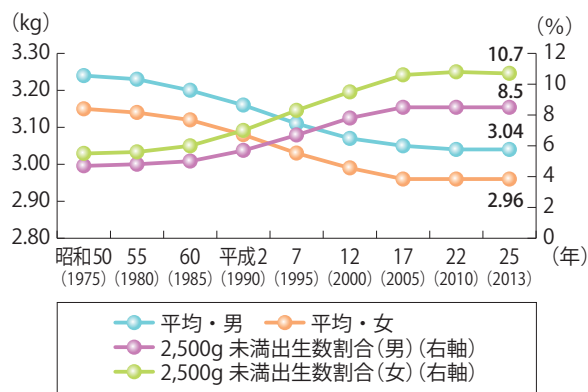
1 体格

出生時体重はおおむね横ばい。身長はおおむね横ばいである一方、小学生・中学生の体重が減少傾向。

出生時の平均体重は、この40年近くの間約200g減少した。平成17(2005)年までは男女ともに減少傾向が続いていたが、以降は横ばいで推移している。低出生体重児(2,500g未満の出生児)の割合は男女とも長期的に上昇傾向にあったが、平成17年以降はおおむね横ばいとなっている。(第1-2-1図)

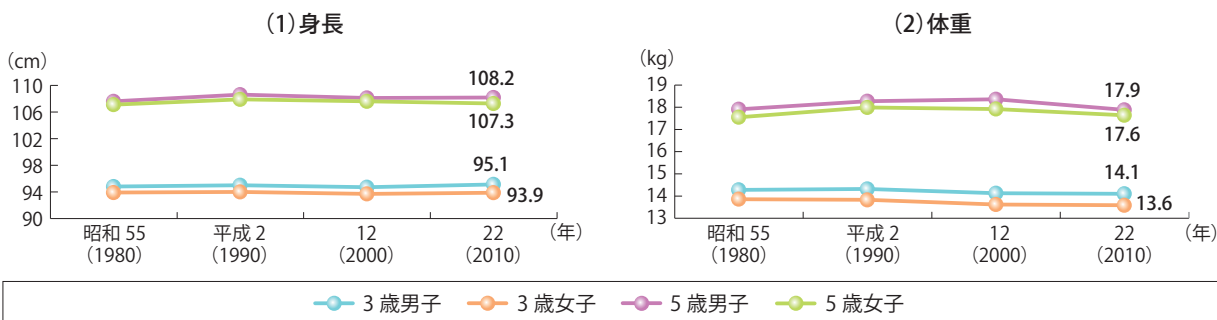
身長は、幼児、小学生、中学生、高校生のいずれでも男女ともに横ばいである。体重は、平成12(2000)年前後から、幼児後半、小学生、中学生で男女ともに減少傾向である。(第1-2-2図、第1-2-3図)

第1-2-1図 出生時の体重



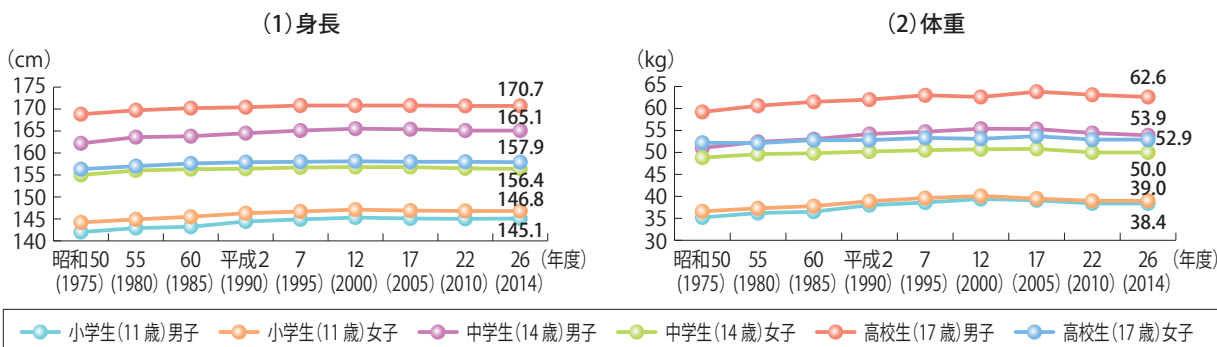
(出典) 厚生労働省「人口動態統計」

第1-2-2図 幼児の身長・体重(平均値)



(出典) 厚生労働省「乳幼児身体発育調査」

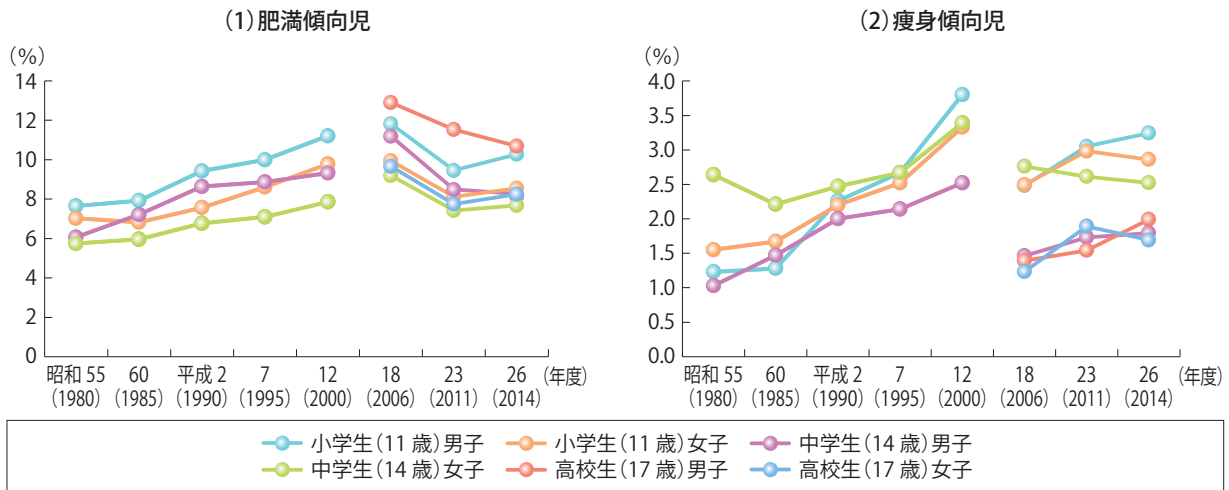
第1-2-3図 小学生・中学生・高校生の身長・体重(平均値)



(出典) 文部科学省「学校保健統計調査」

肥満傾向児の割合は、平成23（2011）年度以降上昇しているが、中学生と高校生の男子では低下している。痩身傾向児の割合は、平成23年度以降、女子は低下している一方、男子は上昇している。（第1-2-4図）

第1-2-4図 肥満傾向児・痩身傾向児の出現率



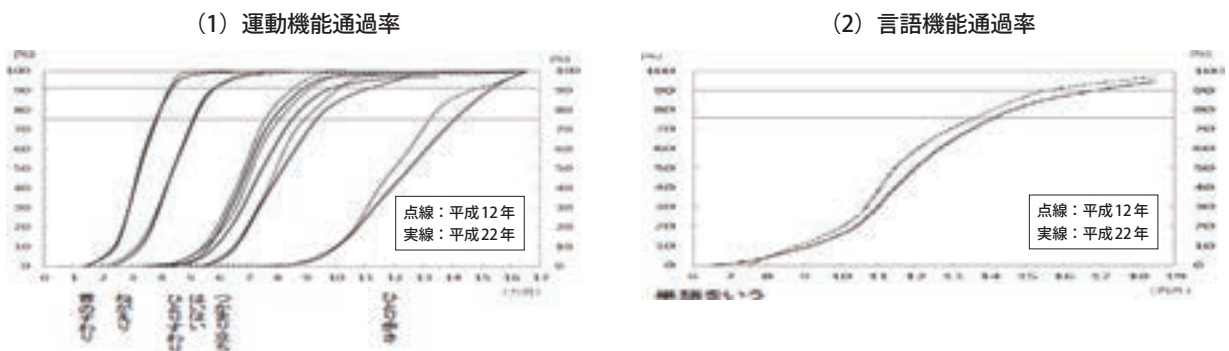
(出典) 文部科学省「学校保健統計調査」
 (注) 1. 平成18年度から算出方法が変更となっている。
 2. 性別、年齢別、身長別標準体重から肥満度を算出し、肥満度が20%以上の者が肥満傾向児、-20%以下の者が痩身傾向児。
 3. 高校生は平成18年度から調査されている。

2 体力・運動能力

小学生・中学生・高校生の体力・運動能力は緩やかな向上傾向にあるが、体力水準が高かった昭和60（1985）年頃と比較すると、依然として低い水準。小学生と中学生の1～2割はほとんど運動をしていない。20代の5～6割は運動習慣がない。

乳幼児の各運動・言語機能を、それが可能なものの割合でみると、平成22（2010）年には、「ねがえり」は生後6～7か月未満の乳児の、「はいはい」は生後9～10か月未満の乳児の、「ひとり歩き」は生後1年3～4か月未満の幼児の、それぞれ90%以上が可能となっている。また、生後1年6～7か月未満の幼児の90%以上が単語を話している。運動・言語機能の通過を平成12（2000）年と比較するとやや遅くなっている。（第1-2-5図）

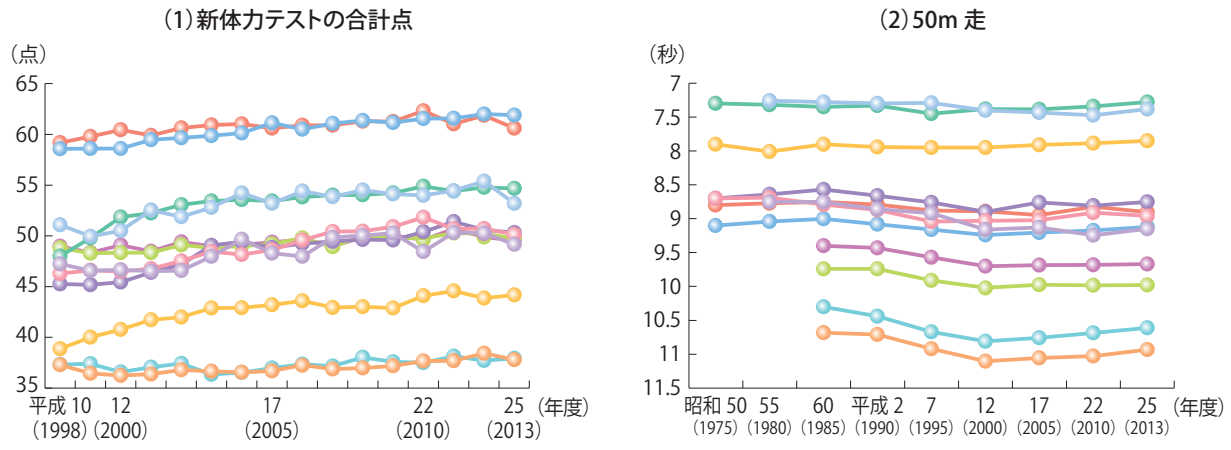
第1-2-5図 乳幼児の運動機能・言語機能



(出典) 厚生労働省「乳幼児身体発育調査」

子供の体力・運動能力をみると、**新体力テスト**の合計点は過去10年間では多くの年代でおおむね緩やかな向上傾向となっているが、体力水準が高かった昭和60（1985）年頃と比較すると、中学生男子の50m走、ハンドボール投げ及び高校生男子の50m走を除き、依然として低い水準にある。（第1-2-6図）

第1-2-6図 6～19歳の運動能力



7歳男子	7歳女子	9歳男子
9歳女子	11歳男子	11歳女子
13歳男子	13歳女子	16歳男子
16歳女子	19歳男子	19歳女子

(出典) 文部科学省「体力・運動能力調査」
(注) 1. 新体力テストは平成10年度から実施。
2. 7歳と9歳は昭和58年度から調査開始。19歳は昭和50年度には調査が実施されていない。

20代の者の歩数をみると、長期的にみて、男性は減少傾向にある。女性はやや減少した後おおむね横ばいで推移している。（第1-2-7図）

運動習慣をみると、1年間にスポーツを行った者の割合は平成3（1991）年以降大きく低下している。平成23（2011）年には、1年間にスポーツを行っていない者が10～14歳の約1割、15～19歳の2割強、20～24歳の約3割、25～29歳の3割以上に達している。（第1-2-8図）